

“MY TOWN” うおっちゃんで

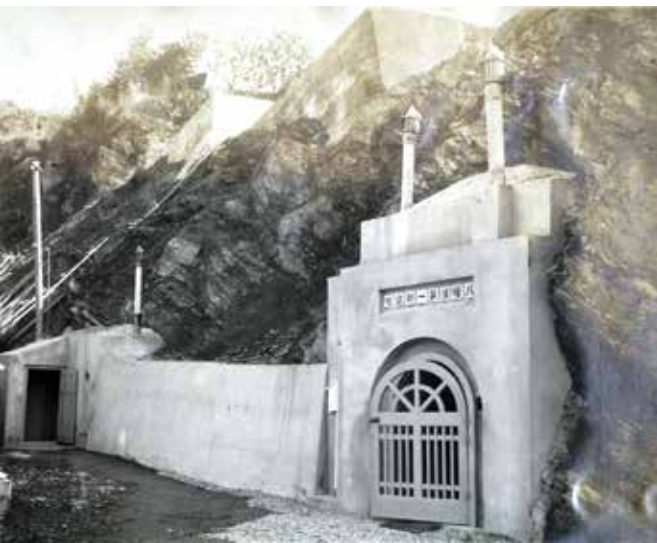
# 歩 & 目 足 & ラテス

Vol.71

## 八幡浜第一防空壕と 宮川一哉日記

岡崎 直司

タウンツアーズム講座主宰・  
ヘリテージマネージャー



竣工時外観（浜上建設・蔵）

今年（昭和70年）は戦後70年。日本人男子の平均寿命80歳の方に例えると、その方は10歳で昭和20年の終戦を迎え、あのポツダム宣

言受諾による天皇陛下の玉音放送を聞いたことになる。平成24年の統計によれば、80歳以上の方々の人口割合は約7パーセント。戦時中の臚げな記憶のある方が、既にそうした割合になってしまっている。日中戦争（1937年）以降の戦没者数は310万人（当時の人口比4%内外）とも言われ、悲惨な戦時体験の貴重な語り部が激減している現状を考えてみたい。

ここに八幡浜第一防空壕という戦時遺産がある。場所は八幡浜市幸町。昭和16年2月22日に落成式が行われたこの防空壕は、当時の新聞に四国初という見出しで掲載されている。勿論のこと防空壕は、戦争兵器として飛行機が敵国攻撃の主力となった太平洋戦争において、その空襲から身を守るための自衛手段であるから、戦争末期には全国各地に造成された。ところがこの壕は、その年の開戦日である12月8日より一年近く前に、皇紀二千六百年祝賀の意図で15年12月29日に着工され、年が明けて完成する。施工は現地に近い地元の浜上建設と協和會八幡浜支部。資金は上田酒造（現梅美人酒造）が提供し表彰されている。

防空法が制定されたのが、昭和12年のこと。盧溝橋事件を皮切りに日中戦争が激しさを増した頃に、戦時防災体制の法制化がされている。



竣工時の内部（浜上建設・蔵）

しかし、実際に米軍による本土空襲が初めて実施されたのは、有名なドーリットル隊による同17年4月の東京空襲で、空母ホーネットから発艦し中国大陸に不時着している。本土空襲が激化するのと同19年末頃からであるので、この八幡浜第一防空壕建設時期は異様に早く、当時の世相として空襲を受ける実感が市民側にあつたかどうかはナゾである。また、空襲という、ある種の負けイクサを想定しての危機管理的発想があつたとしたら、それはそれで凄い措置だと言える。

同18年8月には、金属資源の補充のた



宮川一哉日記

め「金属類回収令」が施行され、全国で二宮金次郎像が学校から消え、寺の釣り鐘はおろか、各家々ではナベ・カマ・ヤカンの類まで国に供出された。応じなければ非国民の時代。そんな時代相にあって、早くから冷静客観的な防空壕という危機対応策を実施した点は、特筆すべき先見性と言えはしないだろうか。

終戦末期に空襲に見舞われ焼土と化した松山、宇和島、今治と違い、幸にして八幡浜は大きな被害を被らなかったが、それでも小型爆撃機が何度か飛来した。その中で、当時、市内の白浜国民学校で代

用教員をしていた、宮川一

哉という人物(防

空壕近く

の松本

町に在

住)の日記

がある

ので掲載

して戦前の

緊迫した

世相を

感じて

みたい。

『昭和二十年

三月十八日晴れ、日

曜日。日直に當って

たので六時起床、七時過ぎ家を出ようとしたら、警戒警報が発令された。学校にかけつけてみると、敵機動部隊土佐沖に来襲。艦載機、中部軍管区全域に空襲とのことであった。初めて見る敵艦載機。晴れた日に高々度をきらきら光りながら飛ぶグラマンF6F。ひしひしと戦の迫るを感じず。魂がかたまるかときへ思われる感懐と興奮で、誰もが空を仰ぐ。その臉は直ちに前線に連なっているのである。決戦なものぞ。今になって飛機足らざるをなげくはおろかなり。只、今の一刻に生命を捧げ持場に敢斗あるのみ。晝食を食べに帰って、飯を済ませた頃、この市の上空で空中戦あり。交戦機の果敢ななぐりこみに飛散するグラマン。今に知れ、神州のおかすべからざるを。手に汗をにぎり息を殺して空を仰ぐ。しかれども、佐島の爆薬庫爆され、大爆発を起こして、煙天に連なる。残念なるもせん方なし。只我れ一刻も早くいきたしと思う。大命の来るまでは、持ち場を死守するのだと思っはいても、ふとそんな気持ちにかりたてられてしまった。全く決戦をまざまざとこの眼で見たのである。忘れようとも忘れ得ぬこの日。何時かは思い知らしめてやるだろう。それまではどんなことがあろうとも頑張り抜かねばならない。』



コンピュータグラフィックスによる  
八幡浜第一防空壕の全容  
(上智様による3D実測調査資料より)